

## ベリーでマチおこし

中川町の取り組み

錦織正智

### 中川町とベリー

旭川から北へ170キロ。中川町は上川管内の最北部に位置しています。人口は約二千人。東の北見山地と西の天塩山地に挟まれた町は、天塩川に沿って南北に細長く開けています。地形は山岳地と平野地に分かれ、泥炭地域を除く平野地には、アスパラガス、ビートにカボチャなどの畑が広がります。寒暖の差が大きい内陸型気候が育む作物は、豊かな滋味が評判です。

近頃、町内の建設業者による農業法人の設立が続いたこともあって、一次産業に活機があります。新たな栽培品目の探求が賑やかです。

例えば、本ワサビと西洋ワサビの栽培がはじまりました。ワサビ栽培から「道の駅なかがわ」にワサビソフトクリームが生まれました。このように一次産品の生産に留まらず、加工により付加価値をつける流通体系は、名物をつくるという点からも町の活気に結びついています。

町内で栽培から加工までを体系化した品目としては、ハスカップ（クロミノウゲイスカグラ）の方が古参です。中川町でハスカップの栽培が始まって十幾年が過ぎました。町内ではジャムや羊かんなどに加工されています。果実は町外へも出荷されています。

そもそも、中川町はハスカップをはじめとするベリーへの馴染みが深く、天塩川河川敷の遊歩道にはクロスグリ（カシス）などが植えられ、町を見下ろす「憩いが森公園」には友好都市の中川村（長野県）から贈られたブルーベリーが旺盛に育っています。時季には、ベリー摘みが風景です。

話題は前後しますが、曖昧な「ベリー」を定義しておきます。ベリーがソフトフルーツと呼ばれることを踏まえて、ここではブルーベリーのように果皮が柔らかくてタネが小さな瑞々しい果実をベリーと呼ぶことにします。

林業試験場道北支場が中川町役場から委託を受けてベリー類の試験を始めたのは2003年度のことでした。「ベリーでマチおこし」を目標に「ベリー類の適応調査と増殖方法の確立」と題して、2005年度までの3年間取り組みました。ベリーに注目した理由は次のことからです。

まず、町内のハスカップ畑が更新時期を迎えていたことです。収量の低い株や美味しくない果実をつける株を取り除いて、品質の良い株に植え替えて、多収穫・高品質への改善を実施する時期でした。

第2に、道内の製菓業界からのベリーへの期待があります。ベリーといえば多くが北方圏の植物ということもあって、北国を連想する果実です。これまではハスカップが「北海道のベリー」の役割を一手に引き受けていましたが、道内製菓関係者からは新商品の開発に結びつく新たなベリーを求める声があります。自ら栽培を手掛ける製菓業者も現れました。

また、北海道に限らず、菓子職人からは冷凍品でしか手に入らない輸入ベリーを生果で求める声もあります。相對して、消費者からもベリーを求める要望が高まっています。背景には健康志向、食の多様化やスイーツ人気などの本物志向が起因しています。

このように幅広い消費者から要望されているベリーは、成長期待品目といえます。

第3に、ベリーの産地形成は、小規模栽培から始めることができる手軽さも理由でした。生産量に応じた消費先を求めることができるので、主要作物のような流通形態に従う必要がありません。少ない生産量でも加工することで価値を高めることが可能であり、また希少性を活かして産直形式の販売もでき

るなど、創意による展開を図れることが魅力です。

第4に、中川町の風土がベリーの産地形成を目指す環境を備えていることです。元来、ベリーの食文化は、厳しい環境の中で自然の恵みを大切に使うことから生まれました。野性のベリーを摘むことから発達しました。この背景を考えると、後述のように中川町の周囲の自然にベリーが豊富であることは産地を目指す上での魅力に大いに寄与する要因です。

「ベリーでマチおこし」の理由は枚挙にいとまがありませんが、「おもしろそうなことはやってみる」という新しいことへの挑戦を推奨する中川町気質が大きなきっかけだったように思います。

**集める・選ぶ・増やす**

「ベリーでマチおこし」の内容を端的に表せば「集める・選ぶ・増やす」に集約できます(図-1)。成果の出口は町の活性化であり、早期に具現化することを目標においた取り組みは簡潔です。

第一歩は素材の探索と収集から始まります。材料を「集める」先は、中川町近辺に限らず、北海道内、さらには海外も対象にしました。求めたものはタネ、植物体、商用品種です。



図-1 中川町におけるベリー類の導入から普及までの概要

「選ぶ」では、中川町の気候や用途に適応したものを選抜します。

続く「増やす」では、これらを苗木に増殖して普及させる段取りです。

研究期間の3年間で扱ったベリーは39種です(表-1)。品種にまで細分すると約50種類を扱いました。材料を求めた地域「中川町周辺・北海道内・海外」について、それぞれの例を紹介します。

表-1 導入した樹種の一覧

導入元と体裁	樹種名
北海道内・中川町・ 林試構内から導入 (一部外国樹種も含む)	アメリカザイフリボク、アロニア・メラノカルパ、エゾスグリ、エゾノウワミズザクラ、オオバスノキ、クロウスゴ、クロイチゴ、クロスグリ、クロミサンザシ、クロミノウグイスカグラ、コケモモ、ゴヨウアケビ、サルナシ、ジュンベリー、シロバナノヘビイチゴ、トカチスグリ、ナワシロイチゴ、フサスグリ、ブルーベリー、ホロムイイチゴ、マルスグリ、ミツバアケビ、ヤマブドウ
海外から実生苗木、 又は商用品種で導入	<i>Actinidia purpurea</i> , American Persimmon, Blackberry, Blue Elderberry, Chilean Wintergreen, China Blue Vine, Gooseberry, Hungarian Cherry, Pawpaw, Pineapple guava, Pink Currant, Sea Berry, Thimbleberry, Tasmanian Vine, White Currant
海外から種子で導入	Autumn Olive, Chilean Wintergreen, Cornelian Cherry, Magnolia Vine, Pawpaw

注：海外から直接導入した樹種は、導入元での通称名を表記した。また学名のは斜体で記した。

### ホロムイイチゴのデビューに備えて

中川町周辺の自然にベリーを見つけることは簡単です。ヤマブドウとコクワは、車窓からも見つけることができる最も身近なベリーです。季節には、イチゴケーキを彩る栽培イチゴの仲間、シロバナノヘビイチゴの紅い果実が林道に映えます。湿原付近に育つクロウスゴは、北米原産ブルーベリーの仲間です。道北の自然にはベリーの賦存量は豊富です。道北に自生する数多くのベリーの中から、ホロムイイチゴの取り組みについて紹介します（写真－1）。

ホロムイイチゴと呼ぶよりも、英名「クラウドベリー」の方が聞き覚えのある方が多いのではないのでしょうか。スウェーデン出身のロックバンド「クラウドベリー・ジャム」が活躍したのは1990年代です。バンドの名前になるほど北欧では人気が高いこのベリー、フィンランドでは「ベリーの王様」と呼ばれています。余談ですが、「ベリーの王様」は国ごとに異なり、何人（？）も居るようです。

日本では福島県を南限に自生しています。国内では岩見沢市幌向（ホロムイ）で見つけたことが和名の由来です。ヤチイチゴの別称のとおり湿った環境を好み、中川町近辺では松山湿原（美深町）が自生地の一つです。

日本では食用としての馴染みは薄いですが、北欧では野生を採集してジャムを作るほかに、ハチミツも楽しむようです。

このホロムイイチゴ、「ベリーの王様」と呼ばれていることに加えて、北海道の地名が付いた名前を持つことを考えると、栽培化を図って北海道発のベリーとしてデビューさせるにはプロフィールは十分に魅力的です。

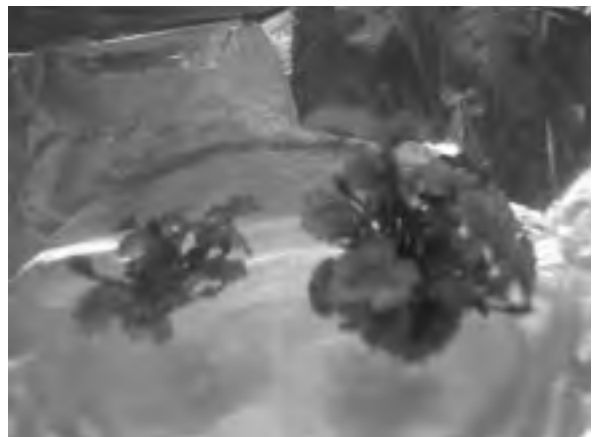
さて、ホロムイイチゴを「集める」です。自生地へ行ってみると、「たくさん生えている」というものではありませんでした。故に、掘り取ることができません。果実も豊富に採れないので、タネも集まりません。そこで、手元に「集める」ことは諦めました。現地保存としました。

続いて「選ぶ」です。ホロムイイチゴは雄株と雌株に分かれる雌雄異株です。栽培化への一歩として、果実をつける雌株を選びました。最後に「増やす」は、短期間に大量の苗を生産することを目的に組織培養を使いました（写真－2）。

苗を露地に植えて、栽培の適否の評価や栽培方法の開発などはこれからの課題です。



写真－1 ホロムイイチゴ（松山湿原）



写真－2 組織培養で増殖中のホロムイイチゴ

**美味しいハスカップを見つけた**

道北から視点を北海道に広げて、北海道のベリーとしてハスカップの取り組みを紹介します。

中川町内で最も大きな規模でハスカップを栽培しているのは、第三セクターの株中川町地域開発振興公社です。約2千株の来歴は勇払原野にまで遡ることができます。

今回の「集める」は、これまでの公社での取り組みに代えて、このハスカップ畑を「選ぶ」対象としました。永年月を経た株は風土に適しているものばかりです。しかし、美味しい実をつける株もありますが、不味いものもあります。収量が多いものもありますが、少ないものもあります。そこで「選ぶ」は、この2点を基準に実施しました。

選抜は2シーズンを通しておこないました。選抜個体の評価は中川町役場と中川町地域開発振興公社の担当者をお願いしました。「中川町で栽培するハスカップの選抜は、中川町民の判断で」という思いからです。

299個体の糖濃度を調査したところ、町内のハスカップの糖度の範囲は5～15%であり、平均値は10%であることが分かりました(図-2)。10%といえば栽培イチゴと同等の糖度です。15%は高級メロンの糖度です。糖度から評価すると、調査対象の半数はイチゴ以上の糖度ではあるのですが、これらが「甘い・旨い」という訳ではありません。糖度と美味しいことは必ずしも一致しないことに気がきました。風味は甘味と酸味・苦味・渋味の調和次第というのが理由です。

このことから、食味の選抜方法を糖度計から官能試験に切り替えました。

只々、食べ比べです。樹勢が旺盛で果実の収量が多い株を選んで、手当たり次第に食べました。

食べ続けた結果、個性の異なる3個体を選びました(表-2、写真-3)。外観は平均的な果実と同等か、一回り大きいのが特徴です。風味を表すと「蜂蜜のような上質の甘味」、「深く濃い甘味」、「控えめの酸味が余韻に残る爽やかな風味」がそれぞれの個性です。

選抜した個体を増やす方法には、組織培養によるクローン増殖を用いました(写真-4)。食べて選ん

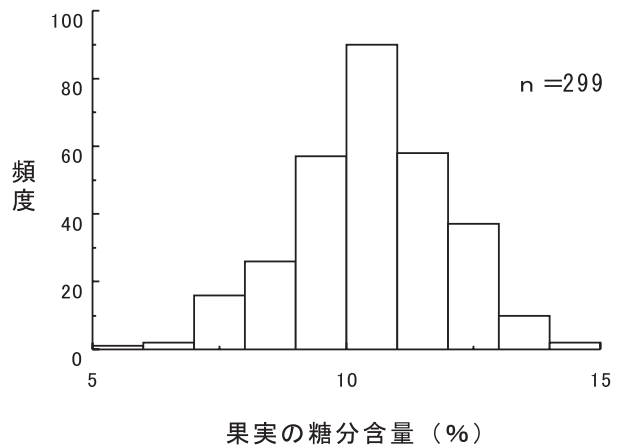


図-2 ハスカップの果実の糖分含量における頻度分布

表-2 ハスカップ選抜個体の果実の大きさと糖分含量

選抜個体	糖度 (%)	果実の大きさ (長さ×幅mm)
No. 1	11.7	20.7×9.3
No. 2	12.7	20.3×9.3
No. 3	9.3	15.7×8.7
調査対象の平均(n=299)	10.4	15.7×9.3



写真-3 選抜したハスカップの果実  
左から対照(平均)と選抜した3個体

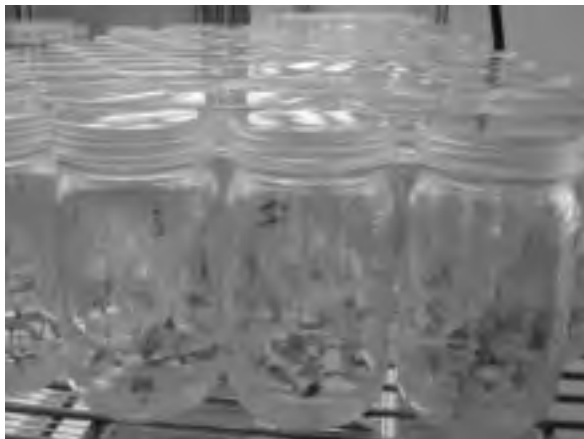


写真-4 組織培養で増殖中のハスカップ



写真-5 海外から導入したベリー類

だ「選抜個体」と同じものを短期間に大量に増やすという点において、最も効率的な方法です。開発した培養技術は、(株)赤平花卉園芸振興公社(赤平市)へ技術移転しました。中川町地域開発振興公社から赤平花卉園芸振興公社への委託により、クローン苗木が生産されています。中川町地域開発振興公社の畑にクローン苗木を植える準備は順調に進んでいます。

#### 個性的な外国のベリー

最後に外国のベリーについて紹介します。外国のベリーの種類は様々です。といっても、ブルーベリーのように既に日本で普及しているものもあります。他方、馴染みが薄いものもあります。外国のベリーを「集める」となると、選択肢はグッと広がります。そこで、樹種の選定には、次の3つの条件を設定しました。この条件は産地としての魅力的に寄与する要件です。

その1、収穫期が異なるベリーを集めること。その2、日本では、まだ珍しいベリーであること。その3、評価が高いものであること。この条件を1つ以上の満たす樹種を集めることにしました。「集める」対象は、タネと苗木です(表-1)。これにも理由があります。

タネから育てると、果実が収穫できるまでに時間は掛かりますが、安価に大量の苗木を用意することができます。そして大量の苗木を対象に「集める・選ぶ・増やす」の過程をとおして、中川町に適した個体を見つけて、普及することができます。

一方、苗木で入手したものの大半は商用品種です。種苗会社や研究機関が育成した品種です。現在、試験栽培をおこない、中川町への適応性を調査しています(写真-5)。試験栽培の経過から目標と一致する品種に巡り会うことができれば、タネから育てるよりも早期に成果を達成することが出来ます。これは新しい植物を早急に普及する場面で使われる「導入育種法」と呼ばれる方法です。

さて、これまでの経過において、数ある外国産ベリーの中でも中川町に適していると考えているものは、キイチゴ類です。紅い果実のラズベリーも、黒い果実のブラックベリーも中川町環境に適して成長が旺盛で多収量です。また、生食にも加工にも適した果実は、万人に受け入れられる風味です。成育特性は野性味が強くて、遅しく繁茂する点には注意が必要ですが、生垣風に仕立てれば収穫も管理も容易です。有望なブラックベリーについては、組織培養を使ったクローン増殖を始めました。

*Actinidia purpurea*も有望です。マタタビ科のこのベリーは中国が原産です。北海道のサルナシと似ていますが、鮮やかな紅い実をつけるところが異なり、分類学上も別の種です。

冒頭で定義した「ベリー」の範疇からは外れていますが、変わったものではPawpaw(ポポー)がありま

す。北米原産のポポーの果実は女性の拳ほどの大きさで、大きなタネがあります。古くは明治時代に日本へ導入した記録がありますが、果実が柔らかいことから、保存技術の無かった当時は流通させることができず、営利栽培には至りませんでした。味はプリンとマンゴーをあわせたような感じです。口に広がる風味は重厚で深く、印象はまるで南国のフルーツです。

海外から集めたベリーについて、中川町での栽培の適否が明らかになるには、もうしばらく時間を要します。タネから育てているものは、まだほんの小さな苗木です。苗木で導入したものには、まだ花を咲かせないものもあります。

### そこにしかないもの

“そこにしかないもの”には惹きつける魅力があります。普遍的ではないもの、特別なものを意味します。

今回の取り組みでは“中川町にしかないもの”を形にすることを目標にしました。「欲しいものを探したら、中川町に辿り着いた」と言われるようなベリー産地の形成に寄与する成果を目指しました。

栽培作物には地方（地域）品種と呼ばれるものがあります。例えば、桜島大根や京野菜のような地域文化の所産といえるものです。中川町にも地方品種があります。「おおくぼとっくり芋（やまのいも）」は、町内の篤志家、大久保富雄さんが育成された品種です。文化や風土を背景に生まれた地方品種は“そこにしかないもの”です。一次産業が基幹産業である中川町において、地方品種の創生は町の魅力へと繋がります。

ここで紹介したハスカップも地方品種として扱われる時を迎えるでしょう。“中川町にしかないもの”としての価値は、他の産地との明確な差異を賦与するに違いありません。

ベリーを通じた“中川町にしかないもの”の価値の発信は、品質・希少性・安定供給・販売形態・加工・風景…、キーワードは多彩です。これからの展開は、あらゆる方向に向けて可能性を秘めています。

今回の取り組みの成果は、中川町役場を通して、中川町地域開発振興公社や農業法人、町民の方々へ普及・還元される計画です。2005年には研究の過程で生産した苗木を役場の春季行事として町民に配布しました（写真－6）。約170名の参加がありました。人口の約10分の1です。

中川町にはベリーを愛でる気風があると思います。寒暖の差が大きい気候は、美味しいベリーを育むと思います。苗木が大きくなる頃には、そして果実を摘めるようになる頃には、中川町の方々のベリーへの想いがより深くなることを願っています。

(道北支場)



写真－6 町民への苗木の配布事業